

城郭探訪

まちづくりと城の址

可児市 美濃金山城

次世代につなぐ「誇り」の山城

可児市長(岐阜県)

富田成輝



東美濃の要衝・可児

可児市は岐阜県南部、旧国名でいう美濃と尾張の国境に位置する、人口約10万人の自治体です。市域の北部には木曽川が貫流し、列島陸上交通の脊柱であった中山道

(東山道)が通っています。水上・陸上ともに人・物の往来が多い土地柄であり、可児は古来より東美濃でも指折りの交通の要衝として栄えてきました。

可児市域には、戦国時代に10カ所を超える山城が築かれました。周辺の自治体と比べて造られた城の数が多いのは、可児が要地であったことの証左といえるでしょう。

名城・美濃金山城

美濃金山城は東美濃屈指の山城であり、岐阜県を代表する城郭の一つでもあります。主郭は標高約276mに位置しており、麓の城下町との比高差は170mほどにもなるため、険峻な立地であり、難攻不落の要塞といつてよいでしょう。

美濃金山城の歴史は、天文6(1537)年の斎藤大納言による「烏峰城」の築城に始まり、その後、永禄8(1565)年に織田信長の

中濃攻略に際して、重臣の森可成が入城し、城の名を「金山城」と改めました。

以降、信長の天下布武とともに歩んだ森家と美濃金山城は、戦国史にその名を刻み、可成の子の忠政が信濃国川中島(現在の長野市)に転封となるまで、東美濃の戦略拠点となり、城下町とともに拡張整備されていきました。

破城と金山越の謎

美濃金山城の特徴は、いわゆる「織豊系城郭」の特徴を備えている上、それが刻が



国史跡・美濃金山城跡



朝日に輝く主郭跡石垣



伝米蔵跡石垣



主郭跡礎石



「還郷」した城門

止まったような姿で観察できることにあります。さらに城の終焉にあたって行われた「破城（※意図的に城の石垣などを崩す行為）」の痕跡が今も各所に残ることは、注目すべき点です。

美濃金山城の破城に際して、その建材が木曾川下流の犬山に運ばれ、犬山城の建設にも使われたという一連の出来事は「金山越」として伝わっています。この「金山越」によって犬山城下に移築されたと伝わる城門の一つが、先ごろ420年以上の刻を越えて故郷に「還郷」したことも喜ばしい出来事でした。

地域の誇りを次世代に

美濃金山城は平成25（2013）年に国の

重要文化財（史跡）に指定されました。また、平成29（2017）年には「続日本100名城」に選ばれています。これは地域にとって大きな「誇り」となる出来事でした。美濃金山城を含む歴史資産の整備には、多くの市民が携わっています。本市では、山城を主軸に定めた「山城に行こう!」といった交流イベントなども開催していますが、いずれも歴史資産の価値を理解し、高めていくという意識を持った市民の力なくしては成しえないものと感じています。

美濃金山城が織豊期に重要な拠点として機能したことは、可児が利便性のある、住みやすい場所であることを語っています。私たちの役割は、その歴史と現在を次世代に受け継いでいくことでしょう。

山城を誇りの一つとして、人が活き活きと暮らせるまち・可児。過去の遺産が子どもたちの誇りとなり、自然と可児に育つまち・可児。このようなまちづくりを今後、推進し、可児のレガシーの魅力を守り、伝え、発信してまいりたいと思います。

歴史探訪コラム

城と都市の でんせつ

江口知秀
建設産業図書館 学芸員

ほうろく瀨の龍

木曾川に飛驒川が合流する川合のあたりに今渡ダムがある。このダムは昭和14年に竣工し、堤高34・3mは当時日本一低い落差のダムだった。建設工事の際、何度も洪水にあったので、人々は「ほうろく瀨」の龍のしわざと噂した。龍のすみがが工事のせいだとつぶれたというのだ。

霊験あらたかな白龍という老婆の占いで、も同じ神託を得たので、恐れ入った工事の担当者は龍神に他所へ移ってもらうための遷座式を行い、工事は無事完成した。

これは昭和55年の『可児町史 通史編』に採録された今渡地区の住民の話だが、この工事に主任として携わった小川蔵夫氏の自伝『回顧録』にも、この件について記されていた。

それによると、確かにたびたび洪水に

あったらしく、古老のすすめで日比野白竜という老爺に占ってもらった（前記の住民の話では婆だった）、実際には爺だったらしい。すると、やはり龍神の祟りだといふので、みんな恐れて働かなくなったから、星野大源という偉い坊さんに一週間ぶつ続けでお経を唱えてもらった。

しかし、科学を信じる小川氏は、読経式などやりたくなかったらしい。知事や市町村長も集まった祈祷満願式の挨拶で、「こんな糞坊主のお経でダムが出来るなら苦労はない。工事とは人の和、力、誠意でやりとげるものだ。このバカ祭りを行ったのはみなさんに工事を知ってもらい、団結してもらったためなのだ」と啖呵を切った。

糞坊主と呼ばれた星野大源氏は、なぜか小川氏を気に入り、印可を渡してやるとほめられたという。